
瓶詰の恋

陳 冰冰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瓶詰の恋

【Nコード】

N9634X

【作者名】

陳 冰冰

【あらすじ】

14歳の葵は、父親の仕事の都合で、東京から熊本の小さな村へ引っ越した。

四方を森に囲まれた閉鎖的な村で、文化や価値観の違いに戸惑いながらも、葵は秘密の恋をする。

村に縛られて心が歪んだ子供達と、彼らを作り上げた大人達の偏見と差別。瓶詰めにした秘密の恋が溢れ出た時、新たな悲劇が起こ

る
.....
。

瓶詰の味

さつきから、冷蔵庫で冷やしてある白ワインが飲みたくてしょうがなかった。けれど、月に一度の贅沢と無理して買ったワインだったから、一滴だって教授に飲ませるのは惜しかった。セックスに応じてあげて、尚かつ高いワインを飲ませてやるほど、もう彼を愛してないのだった。

だから、ことが早く終わるように彼の動きに合わせて大袈裟に声を張り上げる。もう何回も何回もしてる関係なのに、女の態度の本当と嘘が見抜けない情けない男。

老いた匂いのする汗が頬に落ち、張りの無くなった彼の体に腕を回すと、弛んだ皮膚が掌の中でだらしなく弛む。何もかも醜いこの関係を、続ける理由は何だろうか。

「——もう少し居ていいかな？」

それなのに、終わっても居続ける彼に、苛々を隠せないでいた。

「私の心を、揺さぶろうとするのは止めてください」

言葉一つで私の表情が変わるのを、教授は楽しんでるのだ。そう言う意地の悪い所も、昔は好きだった。

「やることやったら、さっさと奥さんの所に帰ってください」

彼との付き合いは、私が美大に入学してからだから、もう十年以上続いている。油絵を描く才能は無かった私が、男の気を惹くことには長けていて、教授の助けで大学の事務員の職にありつけたんだ。これは同僚達が、私について噂してることで、事実だ。

彼はその間に准教授から教授になり、小さかった彼の娘は大学を卒業して春には結婚するようだ。つまり、彼が長年離婚しない理由はもう無い。いや、その問題を口にすればきつと「娘の婚約者の家が堅くてさ。俺達が離婚したら気にするし。孫にも会い辛いだろ」なんて、また次から次へと、最もな理由を並べるだろう。だから、もういいと思う。もう、いい。

やっと教授が帰ってくれて、飲みたかったワインを吐息と共に喉へ流し込む。好物の黒オリーブの瓶詰めには指を突っ込みながら考えた。私は人に言えぬ恋ばかりして来た。恐らく、初めて恋したあの味が忘れられないからだろう。

ドクターには微かなアフターシェイビングローションの香りと、確かな味があった。まるでこの黒オリーブの瓶詰めのように。

オリーブオイルと、微かな塩気とハーブの香り。ドクターには瓶や缶に閉じこめられた食物だけが発する、独特の旨味があった。それは彼自身が、偽りの森の中に閉じこめられていたからではないだろうか。

携帯の振動が、私の頬を揺らす。ワインは殆ど空になっていて、私はテーブルを枕に眠っていた。深夜一時過ぎの母からの電話、何かあったに違いなかった。

「——もしもし？」

「お父さんが倒れた。戻って来て」

母の声はいつものように冷やかで、お陰で酔いの残る私の頭もはつきりして来た。

「容体はどうなの？」

「先生は、もう駄目って言ってる。意識も無かとよ」

東京から熊本に移り住んで十五年。母は不思議な方言を話すように

なっていた。

年老いた両親から離れて暮らしていると、いつかこんな連絡を受ける。覚悟はしていた。でも、こんなに頭の一箇所が急激に凍るような衝撃を受けるなんて。予想外だった。

「お父さん……、もう、駄目なの？」

——もう、死んでしまうの？私が帰って来るまで、保ちそうなの？そんな私の質問を先回りして、母は力強く答えた。

「でもお父さんは、あんたを待つとってくるって思うよ」

「分かった。朝一番の飛行機で帰るから」

父の容体が悪いと言うのに、田舎を思い出す度に浮かぶのは、あの森とドクターの広い背中だった。そして、蝉の鳴き声。わんわん、わんわんと頭の中で響くその声を消したくて、残りのワインを飲み干した。

健気な爪

瑞上^{みずかみ}保養院。その昔、精神病院は主に地方にあった。家族は精神を病んだ者を、「保養」と称して地方の精神病院に送ったからだ。その名残りを残す瑞上保養院で父が働くことになったのは、私が中学二年に上がって直ぐだった。

東京のと真ん中のメンタルクリニックから、なんでこんな山の中の病院で働くことになったのか……。今考えても、良く分からない。

精神病院には体育館や運動場に加え、社会復帰施設を併設しているのが望ましく、土地代が高い都心より田舎の方が充実している。父はそんな最もらしい理由を並べたが、本当のことははっきりしなかった。

熊本県の瑞上村は、美しい川の上流に位置する山奥にあった。小学校と中学校があったが、生徒は各校それぞれ二十人足らず。右も左も、上も下も、どこを見ても森があった。

父は森の中の廃墟を改装して、何とか住める状態にした。あの時の父は遅しくて優しく、私はそんな彼を世界一尊敬していた。母は知的で家庭的な普通の奥さんだった。——なのに。私達は何故あんなのにも、不安で落ち着かなく日々を過ごしていたんだろう？ 私達はある美しい自然の中にあっても、都会と同じように神経を尖らせ、常に注意深く回りを警戒していた。

春から夏にかけての森は美しいと父は言ったが、ここぞとばかりに生命を主張する緑が鬱陶しくてならなかった。植物が持つ素直な一生懸命さは、この村の人達に似通っていたからだ。

彼等は都会から来た生意気な少女を、自分達と同じ純粹さを持つ者として決め、強引に受け入れた。そのことが、私を必要以上に苦

しめた。私は自分が彼等を欺いていることに罪悪感を感じ、いつも後ろめたかった。その罪悪感が、私を空想の世界に向かわせたのかもしれない。

学校からの帰り、獣道を急ぐ時、湿った腐葉土の香りを嗅ぐ時、足の下に干からびた木の実を踏む時、私の心は空想の世界を漂う。美しい男が木陰に潜んでいて、私と彼は恋に落ちる。彼は宇宙人で、自分の惑星に連れて行ってくれるのだ。そうして私はやっと笑顔を取り戻して、体の力を抜くことができた。

幸せは子供から空想力を奪うと、父は言った。父は仕事の傍ら保育園の子供達に絵を教えていたが、田舎の子供が描くのは花や植物ばかりだと、嘆いていた。

「花や植物をそのままそっくりに描こうと必死なんだ。ピンクのチューリップはピンクに、葉っぱはグリーンに。空は青くて川も青い」「その何処がいけないの?」「つまらんじゃないか」

ピンクのチューリップをピンクで描く必要がない?私はこの言葉で自由になれた。私の空想の世界では、空は七色だし、チューリップは金色だ。いや、待て。そこで、私は父の言葉を正しく理解する。私は不幸だから、空想力が備わっているのか……。

ある日、私は本当にエイリアンを見つけてしまった。その木はドングリの木だったのか、樫の木だったのか、忘れてしまったのか、その時から知らなかったのか定かではない。その木の根元にドクターがいたのだ。膝を抱えて、枝で蟻の巣を掘り返していた。アメリカのどこかの野球チームの帽子を被って、大きすぎる麻のシャツを羽織っていた。健康サンダルからはみ出す、綺麗に切りそろえられた爪。その爪の健気さに、心を打たれのを思い出す。

「——あの」

私の第一声を待たずに、彼の有無を言わせぬ尋問が始まった。

「君は誰なんだい？見たことないけど」

「最近越して来たので」

懐かしい標準語に、私はすっかり安堵した。こんな田舎の森の中に標準語を話す男がいるってことは、つまり、不審者と判断しなくてはならないのに。

「もしかして、君は小田さんところのお嬢さん？」

「はい。葵です」

「成る程な」

彼はうんうんと頷いて、帽子のつばをくいと引いて顔を隠した。

「私は、ドクター野上だ」

立ち上がって私に視線を合わせたので、彼が父くらいの年齢だということが分かった。しかし父よりかなり背が高いと、見上げる。

「ドクター……？」

自己紹介をするのに、自分の職業まで言うなんて。驚きながら、彼の不思議そうな瞳を見つめ返す。まるで、生まれて初めて女子中学生を見るような感じだ。

「私は、瑞上保養院のドクターなんだが。実は……」

その後が良く聞こえなかったので思わず身を乗り出すと、ドクターは帽子をもっと深く被った。恥ずかしい。と、言うよりは、顔の右側を隠すような仕草だった。

「あの、何か？」

「実は、家まで帰る道が分からなくなつて」

「道ですか？」

「瑞上保養院まで連れて行ってくれば、分かると思うんだけど」

私は無言で頷いて、歩き出した。

ドクターは、アイロンが掛かった綿のハンカチで無雑作に汗を拭いた。そのチェックのハンカチがズボンのポケットから出てきた時、微かに香水の匂いがした。この人には、女がいる。直感でそう思った。その匂いは、奥さんや姉や妹と言った類の香りじゃない。もっと濃厚な、女の匂いだった。

重たいセーラー服

「あそこで何をしてたんですか？」

ドクターは私の質問には答えずに、

「セーラー服なんて言うのは、厚ぼったい生地で着心地が悪いだろう？」と、笑って言った。

自分が着ている、だらしない麻のスーツを褒めて欲しそうだ。

「そのスーツ、着心地良さそうですね」と、皮肉タツプリに言ってやると、

「まあね」と、微笑む。

帽子の下で顔の筋肉が少し動くのが見えたから、きっと笑ったのだろう。

太陽に透けた緑の葉っぱを眩しげに眺めながら、ドクターは私に歩調を合わせて歩いた。

「君、学校早く終わったんだね」

「今日は土曜日ですよ」

「そっか」

彼は謎が解けたように、時計を調節した。

「電池が止まってたのか」

そして高価そうな腕時計を外すと、草むらに投げ捨てる。

「え？電池を交換すれば使えますよ」

「そうなの？」

随分と意外そうな声だ。世間知らずな大人がいたもんだ。私は苦笑する。

「探しますか？」

「いや、いいよ。君にそんなことさせられない。その草むらには、蛇がいるかもしれないじゃないか」

確かに。膝まである青々と茂った草むらには、どんな危険な生き物が潜んでいてもおかしくない。

「また、買えばいいんだ」

その部分だけ日焼けしてない左手首を撫でて、ドクターはこともなげに言った。

耳に掛かる髪が、汗で濡れている。帽子を脱いで、チェックのハンカチで汗を拭えばいいのに。けれどドクターは、汗が顎辺りまで垂れて来るのをじっと待って、すつと、拭った。

半濁色の汗や、切りそろえられた足の爪。うっすらと体毛のかかる白い腕、彼にはどこか浮世離れた儂さがあった。

「あ！、瑞上保養院だ！」

急に興奮して歩調を早めたドクターが、小石に躓いた。私は咄嗟に手を伸ばす。

「大丈夫だよ」

情け無さそうに笑った瞬間、首筋に汗が流れた。手の甲で拭くと、

眩しそうに私を見上げる。

「君みたいな少女に助けられるなんて、私も終わりだな」

泥に汚れた膝を払う大きな手に見とれてみると、「じゃ、ありがとう」と、それをひらひらと振って見せた。

瑞上保養院に向かう彼の後ろ姿を、私はずっと見守っていた。また、転ぶかもしれないし、もしかしたら……、振り返るかもしれない。でも、ドクターは一度も振り返らずに、保養院の中に消えて行った。

私は急に重たく感じたセーラー服のリボンを取り去った。東京の中学ではブレザーとプリーツスカートだった。ふと、この重たいセーラー服のような何かを、彼も背負っているのかもしれないと思った。ただ、漠然と……そう感じた。

「野上さん？ああ、体の具合が悪くて……、今じゃ院内で雑用をしてるよ」

父は器用に魚の身を解しながら、普段の父に似合わぬ歯切れの悪い回答をした。

「元気そうだったけど？」

「帽子、被ってたか？」

「うん、野球帽みたいなやつ」

「そうか」

父は神妙な顔でそう呟くと、地元の焼酎をちびりと口に含んだ。

「頭の右側を怪我して、右目は殆ど視力もないし、ときどき障害が

出るらしい」

「障害？」

「記憶が無くなったり、感情のコントロールができなくなったり、体の痙攣や……、その、色々だ」

だからドクターは、家に帰る道を忘れてしまったのか。

「勤務中の怪我だったから、病院が保証をして働かなくても良い身分なんだけど。まあ、本人の希望と言うことだったよ」

「怪我？どうしたの？」

私があまりにもしつこく聞くので、母は不審に思ったようだ。

「葵、酢の物を食べなさい」と、話題を変えようとした。

「はい」

母も瑞上保養院で栄養士として働いていた。食に拘りを持っていた母は、作った食事を絶賛しないと途端に機嫌が悪くなった。

「美味しくないの？」

「美味しいよ」

ワカメとキュウリの酢の物を、私に付き合っ て父も口に運んだ。

「野上さんは、患者さんに怪我をさせられたんだ」

瑞上保養院は体育館や運動場だけでなく、畑や職業訓練所も併設しており、九州で五本の指に入る大きな精神病院だ。

その患者は、もうすぐ退院できる位に症状が落ち着いていた。だから畑作業を許されていたのだが、急に暴れて持っていた鍬でドク

ターを襲ったのだ。

「精神病って言うのは、二十四時間症状が悪いつて訳じゃないからな。ふつと良くなって、ふつと悪くなる」

私はドクターが、帽子を深く被った瞬間を思い出した。彼は自分の怪我を隠したかった訳か。

「結婚してるの？」

「うん、奥さんは看護師で、病院で一緒に働いてるよ」

「綺麗な人よ」と、母が付け加えた。

それから暫く、美しい奥さんとドクターの生活が、私の空想の中心になった。

夢見る罪悪

東京の中学では成績は常に上位だった。それなのに、田舎での私ときたらクラスで最下位。一クラス四、五人の瑞上中学校の生徒は、常に教師からマンツーマンの教育を受けていた為、予想以上に優秀だったのだ。

私は恥じ入り、「なんや！都会の子は、勉強のあんまりでけんや！」と、同じクラスの新田貴弘にからかわれる度に、頬を赤くして俯いていた。

「なんば言つと！」

頬を膨らませて抗議するのは、体格の良い田中美代。彼女は何かと世話を焼きたがり、私を困惑させる。そんな三人を冷静な顔で見つめているのが、義元真人。瑞上保養院の院長の一人息子だ。こんな田舎にしては洗練された男の子で、その切れ長の涼しい瞳で見詰められると、私は自分がとても間抜けに思えてしまう。実は、ちょっと格好良いと思っていた。

「貴ちゃん、止めんね」

真人が変声期の不思議な声で、貴弘を諫める。同級生の男子は二人つきりであるから、彼等は兄弟のように仲が良い。ずーっと一人つきりだった美代は、私という姉妹ができた喜びで舞い上がっている。

「葵、トイレに行く？」

東京でも女子同士でトイレに行かなかったのに、美代はその大きな体を揺らして私の後ろを付いて来た。

「美代ちゃん、トイレ行きたいの？」

「私が一緒に居らんと、貴弘があんたにちよつかいば出すけん」

「あー、私平気だよー」

「葵がもぞかけん、貴弘はあぎゃんちよつかいば出すとよ」

「もぞか？」

聞き返すと、美代は大声で笑った。トイレの中に、彼女の下品な声が木霊した。

「都会ん人には分らんかあ、可愛いつて言う意味たい」

もぞか……。私は心の中で反芻する。なんてくすぐったい響き。私は照れて古くさい木製のトイレスリッパを、カタカタと鳴らす。

「東京では、彼氏はおったとね？」

「うっん、いないよ」

美代は鏡を見ながら、癖つ毛の長い髪を無理矢理ポニーテールにしている。

田舎の学校は校則が厳しいと聞いていたが、肩に少しでも触れたら縛るなんて……。しかもゴムは黒か茶か紺。私はお洒落を気にするタイプではなかったが、あまりにも酷すぎる。無雑作に束ねたお下げ髪を鏡の前で振ると、年齢より幼く見えた。

私は理数系が弱くて、貴弘は理数系が強く、真人は文系だ。貴弘に助けて貰うことが多かった。だから、からかわれても言い返すことができなかったのだ。

「葵、帰らないの？」

「貴弘君に、数学を教えて貰わなきゃ」

貴弘は体操着に着替えていた。部活に行く前の、少しの時間を君の為に裂いたんだ。と、というような顔で、机に肘を付いてその不機嫌な顔を支える。

「違う。違う。そこは……」

シャーペンでさらさらと問題を解いて行く貴弘の額に、吹き出物が出ていた。髪は短く刈り込んで、凛々しい眉は手入れもしていない。東京ではあまりいないタイプの、男子。

「お前、聞いてんのか？」

上目使いで見上げる瞳は、大きくて力強い。

「うん、聞してる。聞してる」

「そいで、ここはたいね……」

貴弘の言葉は乱暴だが、教え方は丁寧だ。

「長距離と短距離、どっちが得意なの？」

「え？」

シャーペンをくるくる回すのは、彼が何か考えている時の仕草だ。

「え？何や？」

「走るの。どっち？短距離と、長距離」

「あー、俺は長距離」

「早いでしょ」

県大会に出場するのが決まっていると、美代から聞いていた。

「……本当は野球とかやりたかばってん。人数の居らんけんね。この中学校には、柔道部と、陸上部しかなけん」

貴弘が一瞬眩しそうな顔で、校庭を眺めた。五時を過ぎているのに強い陽射しが降り注ぐグラウンドで、陸上部が練習をしている。

田舎の子供達には、沢山の選択肢は無い。行く小学校、中学、高校から将来なる職業まで決まっている。美代と貴弘は農業高校に進学して実家の農業を継ぐし、真人は熊本市内の高校に進んで将来は父親の病院を継ぐ。彼等はそれを当然と受け止め、自分の夢を抱くのは罪悪とさえ思っていた。

「もう分かったや？」

「うん。何となく」

「また、教えてやつけん」

私に背を向けて、貴弘は言った。その広い肩にボンとタオルを掛けると、それを合図にピョンピョンと準備運動をするように弾んだ。

「帰り道、森の中は気を付けろよ。こないだも、三年の女子が襲われたけん。お前も、気を付けんば。小田は、もぞかけん」

そう言うと、勢い良く教室を出て行った。

「もぞかけん……」

もぞかけん……。貴弘のはにかんだ笑顔を思い出した。

二回目の道案内

田舎では、誰かに愛を告白することが、とても神聖な儀式だと考えられていた。その告白の効力は、「一生」続く。

美代の両親は幼いときから「将来は結婚するだろう」と周囲から噂され、その呪縛から逃れられずに結婚した。

美代も、真人と結婚することを夢みる。真人と美代は、保育園から噂されたカップルだ。しかし不幸なことに、保育園では可愛かった美代は、大きくなつるにつれて段々太って醜くなつて行つた。そんな美代を、真人は最近避けている。

もし私が貴弘と噂になつたら、その噂に一生を縛られるんだろう。田舎とは、本当に住み辛い。

そんなことを考えると、あの森の入り口に差し掛かった。日も暮れかかり、森の中は薄暗かった。貴弘が危ないと言つたのは、つい最近ここを通つた女子生徒が、痴漢にあつたからだつた。

「君、何時だと思つてるんだ？」

木陰から急に声がして、私は体を竦める。

「ドクター？」

「小田さんところの、お嬢さん…、だつたね」

そして、真新しい時計を眺めで、眉を顰める。

「随分、帰りが遅いじゃいか」

「ドクターこそ……。こんな遅く、森の中で何をしてるんですか？」

「あー、まあ」

意味もなく、帽子の鍰をいじる。

「帰り道が分からなくなっただんですか？」

「う、うん」

ドクターは、恥ずかしそうに私から視線を外して、空を見上げた。生い茂った木の葉の間だから、満天の星空が覗く。

「また一緒に、瑞上保養院まで行きますか？」

「宜しく、頼む」

そう言った後は急に明るくなって、私の後ろを鼻歌混じりについて来ている。

「で、君はなんでこんなに帰りが遅いんだい？」

「私、数学が苦手なんです。だから、補習です」

「数学かい？数学みたいに簡単な学問はないよ」

ドクターは馬鹿にしたように鼻で笑った。帰り道すら分からなくなる大人に、馬鹿にされたくない。そう言いたかったが、ドクターの不幸な事故のことを聞いていたので、ぐっと我慢した。

「私が教えてあげても良いよ」

「え？」

「二回も道案内をお願いしちゃったから。それに、私は暇なんだよ。たいした仕事もしてないからね」

私は答えを迷っていた。父に言ったら反対するだろう。しかし、貴弘の好意が煩わしくなっていた。

「では、お願いします」

消え入るような声で返事をする、目の前に瑞上保養院が見えて来た。

「では明日、森の中で待つてよ」

彼が保養院の中に消えて行く、その後ろ姿が見えなくなるまでずっとそこに立っていた。前回と同様に、彼は振り返らなかった。

私は、ドクターの後ろ姿が好きなのだった。姿勢の良さが、彼の身長をもっと高く見せていた。ポケットに両手をつっこんで、肩を揺らしながらゆっくりと歩く。とても優雅だ。その姿に見とれていたら、急に彼が振り返った。

「早く帰りなさい！」

そして大きな掌をひらひらと、こちらに振る。ドクターが振り返ったのは、後にも先にもあの夜だけだった。

「さようなら」

さようなら。

ドクターと別れる時は、私はこうやって満面の笑みを浮かべて手を振った。私の最後の記憶が、笑顔であって欲しくて。

林檎とスパイス

次の日の夕方。貴弘には用事があるからと言って、ドクターとの待ち合わせ場所へ向かった。

「おう、来たね」

彼はいつもの木の下で、私のことを待っていた。白いシャツをふわっと身に纏って、大木を背に両手をポケットに突っ込んで。勿論帽子は目深に被っている。夏がもう直ぐそこに来ていて、今日はずっと暑かった。それなのに彼の周りだけは、涼しい風が吹いているように感じた。

瑞上保養院までの道順を忘れるから、もしかしたら私のことだっ
て忘れてしまいかもしれない。半信半疑だった。

「じゃ、こっちだよ」

「あの……。道、分かるんですか？」

「勿論。こっち」

人が殆ど通らないような細い獣道を、ドクターが大腿で歩いて行く。

「あの、自宅ですか？」

「そうだな。今は自宅」

蜘蛛の巣の掛かるその小道を歩いて行くと、小さな丸太小屋が見えて来た。

「ここが住まいですか？」

「厳密に言つとそうじゃない。自宅は、瑞上保養院の裏にある社宅

だよ」

「じゃ、ここは？」

「あー、何だろうなー。隠れ家かな？」

途端に恐ろしくなった。ドクターは頭にダメージを受けた人だ。二人つきりになっても大丈夫だろうか？

「この小屋は、私が作ったんだ」

手招きされて恐る恐る中に入ると、まるでお伽話のような内装だった。手作りのテーブルと、椅子。パッチワークの可愛いベッドカバー！。

「家内が、作ってくれてね」

綺麗な奥さん。母の言葉が頭に浮かんだ。家内 その言葉言う瞬間、彼が悲しげな顔をしたのを私は見逃さなかった。

「何だか、ままごとの家みたい」

「そうだね。私はアンデルセンみたいな世界が好きでね。家内は少女趣味って笑うんだけどね……」

まただ、家内 と言う度に、表情が曇る。

小さなキッチンで沸かしたお湯で、ドクターが紅茶を入れてくれた。不思議に歪んだ茶色のマグカップを、恥ずかしそうに手渡す。

「これは、私が作ったんだ。ここは、私の工房みたいなもんだね」

紅茶はりんごの香りがして美味しかったが、それを彼に伝えると、きつと家内 が選んだと言って悲しい顔をするだろうから、私は

ただにつこりと微笑むだけにした。

「帽子、脱がないんですね」

「ああ、うん。まあ」

彼は曖昧に答えて、「さあ、初めよう」と厳かに宣言した。

教科書を捲るドクターの指はとても長くて、足の爪と同じように綺麗で、桜貝のようにほんのりピンクだった。

彼はどこもかしこも手入れが行き届いていた。それは 家内 がそうしてるんだろうか？ 私はなんだか、理由の分からない切ない気持ちになった。

「分かる？」

「は、はい」

「じゃ、その問題を解いてみて」

そう言つて、窓際に行つて煙草に火を付ける。夕日に照らされたドクターの横顔は、やっぱり帽子に隠れて見えない。私はそこを見たいと思つた。傷を。

「綺麗な夕日だよ」

煙草の煙が漂う部屋で、私は賢明に数式を解いている。時々ドクターが、私の背後からその長い首を更に伸ばして覗き見る気配がした。髪を縛つて来るんじゃないかった。両耳の後ろでしっかりと結ばれた髪を背中に垂らしたら、少し大人っぽく見えるかもしれない。そんなことを考えていたら、額をコツコツと人差し指で突かれた。

「はい？」

「集中、集中」

煙草の香りのする息が、鼻先まで近づいていた。薄っぺらい唇の周りには、うつすらと髭が生えている。家内の手入れがそこまで行き届いてないことに、私は何故だか喜びを感じる。

「できました」

「どれどれ」

そう言って愉快そうに笑うのは、私が問題を間違えているからだ。ドクターがその長い足を組んで、煙草を燻らせる様子をこっそり盗み見た。

「あ、ごめん。煙いかな？」

「……大丈夫です」

茶色くて細いその煙草は、母のキッチンに並ぶスパイスの香りがあった。

その時、昔風の黒いダイヤル電話が、りんりと鳴り響いた。その受話器を、ドクターは静かに持ち上げた。

「はい。ん？ああ、今山小屋だから、PHSは通じなんだよ。大丈夫、大丈夫、具合が悪くなった訳じゃない。うん…、うん…ごめん」

ドクターが話しているのは、家内 だと思った。きっと、連絡も無しに居なくなった彼を心配していたんだろう。

「分かった」

そう言って、受話器を置いたまま、ドクターは暫く動かないでいた。

まるで、心の中と、頭の中を整理するように。じーっと目を閉じて、呼吸を整えていた。

「帰らなきゃ。家内が、心配してるから」

「はい。すいません」

「間違ってた所、明日教えるから」

そう言つて、ドクターはPHSの電源を入れた。圏外じゃなかったんだ。彼は態と電源を切っていた。何故だろう？でもその事を問いつめれば、彼が悲しい顔になることが分かっていたので、私はそれに気付かない振りをした。

田舎への反抗

「お前、もう俺に数学ば教わらんでも良かとか？」

「う、うん」

「何でや？」

下駄箱の所で、貴弘に呼び止められた。これから部活に行くのだから。体操服に着替えている。貴弘が体を動かす度に少年特有の青臭い匂いが漂って来て、私はどきまぎと彼と距離をとった。

「家庭教師の先生が、来るから……」

「ふーん。さすが都会の人は違うねー。家庭教師雇ったとかー」

そう言つて、背伸びをする。貴弘は私と話す時、何時も準備運動のような仕草をした。それが照れ隠しであることに、最近気付いた。太股あたりに筋肉がついてきて、貴弘は真人よりどんな大人の男の体になって行く。私はそんな彼の成長過程が、何だか生々しく気持ち悪い。それは足が生えた蛙を見た時の、衝撃に似ている。おたまじゃくしと蛙の中間の、異形の生き物。

「また、教えて欲しい時はお願いするから」

「おう！じゃ、明日なー」

貴弘は疑うことを知らず、大きく手を振って校庭に向かった。

彼の素直な優しさや、真っ直ぐな気持ちは私を怯ませる。誰も歩いていない雪の上に、足をぽんと乗せる。そんな、なんてことないことが躊躇される瞬間に似ている。

「葵、図書館に行かんね？」

美代はいつも私を監視している。今も、貴弘とのやりとりを聞いてたのだろうか。絶妙な間の良さで現れた。

「今日は、用事があるから」

スニーカーの紐を結ぶのもどかしい。美代を、振り切らなければ。

「用事って何よ？貴弘との補習も止めたと？」

「うん」

「へ」

意味深な顔で、腕を組む。その仕草で、彼女の威圧感が増した。

「葵、昨日から様子のおかしかしい。男二人には分らんかも知れんけど、私には分かつと」

「何が？」

美代は暫く探るような目つきで見詰めていたが、急に驚くようなプランを語り出した。

「私ね。私と真人が結婚して、葵と貴弘が結婚したら良かと思うとよ」

「何で？」

どうすれば、そんな馬鹿げた考えが生まれるのだから。美代の思考回路が理解できず、私は不愉快な気持ちでスニーカーの爪先を眺めた。そうして、反撃のチャンスをじっと待った。

「そうすれば、ずっとこの四人で付き合って行くっど？」

「それが何？四人でいることがそんなに大事？」

「大事に決まっとるよ」

私はこの議論が平行線を辿ると分かっていた。こんな小さな村で育った彼女と、都会で育った私の間には、大きな大きな溝がある。私が良い子の振りをして付き合っている限り、美代の妄想が私を困らせるだろう。はつきりしなければいけないと思った。

「私ね、ここが大嫌いな。こんな田舎ぞつとする。だから私に構うのは止めてくれない？」

美代が腕組みをしたまま固まった。ふつくらした頬が真っ赤に上気していた。

美代は、激しく怒っていた。いや、本当は動揺していた。彼女の十数年の価値観を、私が真っ向から否定したのだから。

彼女はクリスチャンが神を否定された時のように、憐れみと蔑みの瞳で私を眺めた。

「あんたがこん中学に来て、誰が世話ばしてやったと思とうと？」

「世話？誰が頼んだ？こんな小さな中学校、どこに何があるかなんてあんたに教えて貰わなくっても直ぐに分かったよ。大きなお世話だつて言うの！うざいっつーの！」

気が付くと、私は大きな声で叫んでいた。

「な、何ね！」

美代も負けじと大きな声を張り上げる。まずいと思った。殴り合いの喧嘩になったら、私は彼女に敵わない。じりじりと近づいて来る美代の巨体から逃れると、いつの間にか後ろに立っていた真人にぶ

つかった。

「真人君……」

「真人、聞いてよ!」

と、美代が興奮した声で捲し立てるのを、真人はいつもの冷静な声で諫めた。彼女は、この声に弱い。

「美代、さっきから聞いとったけど、美代は自分の価値観は他人に押しつけ過ぎと思う。小田さんには小田さんのペースもあつし、いつもいつも美代と一緒にじゃ、息が詰まっよ」

「真人? あんた、葵の味方ね?」

「誰の味方でんなか。俺は客観的に見て言いよつと」

美代の議論の相手が真人に移ったことを良いことに、私は学校を飛び出した。

湿った謝罪

季節は「流し」になっていた。毎日激しい雨が続き、全ての物を洗い流してしまいそうだ。だからこの地方では、梅雨を「流し」と呼ぶのだ。

ぬかるんだ森の道を帰るのには、辟易していた。スニーカーはドロドロになって、白い靴下が赤茶色に染まる。そしてこの湿度の高さ。森の中は植物が吐き出す青臭い息で、ムシムシしている。

それに、気を付けなければいけないのは櫨の木だ。櫨をなぞった雨の滴が体に触れると、被れて酷い痒みが襲う。私が田舎に来て初めて覚えた植物は、この櫨の木だ。私は必死で傘を握り締めて、その滴を避けるように森の道を急いだ。ドクターを待たせなくなかった。

しかしいつもの木の下に、ドクターの姿は無かった。もしかしたらこの酷い雨の中を待っていていられずに、小屋に行ってしまったのかも知れない。

「——ドクター？」

控えめにノックして彼を呼んだけれど、小屋の中は静まりかえっていた。ドクターは私との約束を忘れてしまったのだろうか？それとも私が遅いから、家に帰ってしまったのだろうか？

「ちゃんと、家に辿り着いたのかなあ……？」

家に辿り着けたか心配だから。しかしそれは、言い訳でしかなかった。私は美しい 家内 と、ドクターの生活を覗きたい衝動を、押さえられなかった。だから彼の自宅である、瑞上保養院の裏へ向か

ったのだ。

そこには遠くから呼び寄せた医師を住ませる、一戸建ての庭付き社宅が三つ並んでいた。今はドクター夫婦しか住んでいない。本来なら私達もこの並びに入居する予定だったのだが、変わり者の父はそれを断ってあの廃墟を選んだのだ。

病院の影に隠れて陰気で湿っぽい場所なのに、この連日の雨だ。そこに足を踏み入れた途端、薬品と黴臭さが混じった、何とも言えない不思議な匂いがした。それは初めて嗅ぐ、いや感じる、淫靡な、あの時の私にはそれを表現する感覚がまだ備わっていないかったが、所謂「性的な匂い」だった。

紫陽花が柵代わりになった家に、ドクター夫婦は住んで居た。玄関先まで行って呼び鈴を鳴らすかどうか迷っていると、庭の方から切れ切れの甲高い声が聞こえて来た。

それは女性の断末魔のようでもあったし、誰かを蔑んだ笑い声のようにも聞こえた。私のこの下品な行動を笑っているのだろうか？ 何度も逃げ出したい衝動に襲われた。しかし、その純粹で真っ直ぐな興味が、私を其所に引き留めた。

芝生の生える小さな庭に回ると、その声が雨戸の隙間から聞こえるのが分かる。ぐじゅう、と、スニーカーが雨を含んだ芝生に沈んだ。

その小さな庭には、玩具が散乱していた。セルロイドの人形やプラスチックの積み木。機械仕掛けの犬。これはきつと「キャンキャン」と鳴いて宙返りするタイプ。それらの玩具は、この芝生に放置されて随分経っているように見えた。——もう、あの犬が鳴くことはないだろう。そうか、ドクターには子供が居るんだ。その事実は、私に衝撃を与えた。

声はだんだんと激しくなっ行き、女性は今にも死にそうな声を張り上げている。私は恐怖心と戦いながら、雨に湿った木製の雨戸の隙間に片眼を寄せた。

あれは一体なんだったんだろう。それがどういう状態だったのか

分かるのは、大分後になってからだ。私が確実に大人になってからだ。ただ、母は正しかった。ドクターの 家内 は、とても美しい人だった。

「葵君……」

囁くような声と、口を塞ぐ大きく柔らかい手。振り向くと、ドクターが直ぐ後ろに立っていた。ドクターの悲しげな顔を見て、私は自分が、大きな間違いを犯したことが分かった。

「大丈夫かい？さ、行こう……」

私が泣いているのは、中を覗いてショックを受けたからだと勘違いした彼は、戯けた仕草で頬をくいと抓った後、肩を抱き寄せた。でも私が泣いたのは、ドクターを悲しませるようなことをした、自分が許せなかったからだ。

「——ごめんなさい」

呟く私の頭の上で、大きな蝙蝠傘が開いた。私の傘は何処？そんな疑問は、極度の緊張でどうでもよくなった。

「君が謝ることは無いよ……」

泣いた私の顔より、悲しみに歪んだドクターの顔。彼は涙は流してなかったが、泣いていた。私より、激しく泣いていた。

「君の家まで送るよ。傘、無いみたいだし」

濡れないように私の肩をぐっと抱き寄せた彼の左手が、雨に打た

れ続けている。彼が私の為に犠牲を払うのは駄目だと思った。私はドクターに縋り付いて、そんなことはしなくてもいいんだと言いたかった。誰の犠牲にもならなくていいんだ。ドクターはもう既に、沢山の痛みに耐えているんだから。

今日のドクターはスナフキンみたいな帽子を被っていて、それは野球帽より似合っていた。その事を伝えようとするけれど、口を開いたらもつと泣いてしまいそうだった。

大きな傘の下の薄暗い空間で、こんなに彼の傍にいたことが我慢できない位に恥ずかしかった。私は浅い呼吸を繰り返しながら、自分の感情を必死にコントロールしていた。

乾燥した踝

「――またね」

ドクターは私を家まで送ると、そう言っで背中を柔らかく押した。

「ありがとうございました」

頭を下げてゆつくりあげると、「うん、うん」と微笑む。私は彼の皺が好きだった。笑った時に顔に形成される魅力的な皺達。いつか……、触らせて貰おう。

「あら、野上さん？」

母がガラガラと玄関を開けて、顔を覗かせた。仕事から帰ってまだ間もないだろう。顔にはうつすらと化粧が残っている。母の背後から、甘辛い煮物の匂いが漂って来た。

「お嬢さん、傘が無かったようなので……。送って来ました」

「あら、それはすみませんでした。葵、傘どうしたの？」
「分からない」

私は急に不機嫌になり、どすどすと家上がった。ドクターに対する母の不遜な態度が、見てられなかったのだ。母はまず彼の頭から足先まで舐めるように見て、その後はずーっと帽子を被った頭を見ていた。傷があるだろう、あの箇所を。

その不躰な視線にも、ドクターは柔らかく微笑んでいた。それに、母の剥げ掛かったマニキュアの残る裸足の足が許せなかった。どこもかしこも綺麗に整えられたドクターの前で、母は薄汚く下品に見

えたのだ。私は母を軽蔑し、その娘である自分を恥ずかしく思った。

「――では、失礼します」

ドクターの声で、窓へ走り寄りつて、彼の傘を見送った。ガラスに張り付いて、振り向け、振り向け、振り向け、振り向け！と念を送ったのに、やっぱりドクターは振り向かなかった。

その時、かくんと、ドクターの体がよろめいた。サンダルが、水溜まりの中に浮かんでいる。サンダルで、こんな泥道を送って来てくれたのか。きっとあの健気な爪先は泥に汚れているだろう。私はあることに気付いて、ドクターを引き留めたい衝動に駆られた。このままドクターを家に帰したら、あの美しい 家内 がその足を綺麗にするだろう。

私はその情景を、しっかりと想像することができる。洗面器にぬるま湯を張って。家内 がゆつくりとタオルをそれに浸す。そしてドクターの足を優しく拭くのだ。乾燥した踝に指先を触れ、後で保湿クリームを塗らなきゃなんて思うのだろう。

ドクターは縁側に腰掛け、そんな 家内 の旋毛辺りを優しい眼差しで見つめる。そして時折、庭に散乱した玩具に視線を動かして、子供の事を考えたりするのだ。その瞬間に、ドクターのその思考の隙間に、私が滑り込むことが可能だろうか？可能なら、どうすれば良いのだろうか？

「葵、あんた本当に傘を無くしたの？」

急に開けられた襖。私の部屋は和室で、「部屋に入る時はソックすること」と言った暗黙のルールは、ここに来てから自然に無くなっていた。

「――うん」

「ねえ、野上さんとは何処で会ったの？」

「森の中。時々、森の中ですれ違ったことがある」

「そうなの？ 気味が悪い人だから、あんまり親しくならないようにね」

「はい、はい」

私は母を黙らせたかったので、机に向かい数学の教科書を開いた。母は私の苦手教科を知っている。その苦手教科を勉強している時、不機嫌で凶暴になることも。

赤い布団の夢

その夜、夢を見た。何処までも続く白い壁。そこに開けられた丸い穴、私はそつと片眼を当てる。

赤い敷き布団の上の 家内 が、朝顔柄の浴衣の前をはだけ、後ろへ仰け反り、白くしなやかな首を撓らせる。真っ白な肌に走る、青い血管まではつきりと見えた。

汗に濡れた黒髪が、波に揺れる海藻のようにユララと、私の方に伸びて来る。 家内 は何かに取り憑かれたように、意味不明な言葉をつきながら小さな悲鳴をあげる。

家内 の鎖骨から下は、襖に隠れて見えない。ドクターではありませんように……と、祈りながら眼球だけをぐるぐると動かして中の様子を窺っていた。

その内に、 家内 の長い髪は、まるで独自の意志を持った生き物のように、私の眼球をめがけて襲って来た。

大きな手が頭を押さえつけいる。バタバタと体を擦って逃げようとするけど、どうしてもその手から逃げ出せない。

「葵君……」

その声は、ドクターだ。止めて、止めて、止めて！叫びたいけど、口からはシューシューと息が漏れるだけだ。

「私を好きになる代償は、これだよ」

その声と同時に、 家内 の髪に、私は眼球を挟み取られる。

でも相変わらず 家内 は、赤い布団の上で悲鳴を上げている。髪に弄ばれた眼球は空中で飛び回り、まるで目玉親父のようだ。私はおかしくって、おかしくって、大声を上げて笑ってしまう……。

その自分の笑い声で、目が覚めた。

「髪が伸びる夢？髪が伸びる夢は、生命の漲りを表してる。っていう説があるな」

父は味噌汁を啜りながら、商売柄だからか妙に芝居がかったイントネーションで語り始めた。

「目玉は？」

「眼球は、知識とか、思考とか、そんな説が多いけど、……女性器って説もある」

「ちよつと、お父さん！」

母が鋭い声を上げた。

「朝っぱらから何を言ってるんです？全く、葵も変なこと言わないでよー！」

私は母が差し出した胡瓜の漬け物を、態とばりばりと嚙った。家内が私の眼球を持って行った意味が、何となく分かった気がした。

学校では美代が私と距離を取ろうとする余り、なんだかきこちない仕草になって貴弘と真人を戸惑わせていた。

美代がどんなであろうと、ただ、私にくつついて来ない事が楽しかった。田舎に来て初めて、自分のペースで生活できる喜びを感じていた。

「お前、意外に勇氣あつとな」

貴弘が給食を運びながら、そう私に耳打ちした。

勇氣？違う。意地の悪さだ。私は都会の薄汚れた空気を吸って生きて来た害虫だ。無農薬野菜の彼等を、少しずつ蝕んで行く害虫だ。その内、彼等は私の本性を知って、嫌い恨むだろう。それで結構だ。自分を偽って生きるこの息苦しさには比べたら、他人の敵意なんて何ともない。

「――何？」

美代が黙って、いつものように四つの机をくつつけた。私はただ憮然と、彼女のその行動の真意を問いただす。この期に及んで、彼女はまた、この「四人」に拘るのか。

「私とあんたのことは、真人と貴弘には関係なかけん」

私は無言で給食を口に運んだ。母が食べたなら怒り狂うような、不味い食事を。パサパサで不味いコッペパンに、固まったマーガリンを無理矢理塗り込んで。

「そろそろ期末試験だな」

真人が上品に、口元をハンカチで拭って言った。私はいつも、彼こんな上品さを感じて眺めた。全てに躑躅が行き届いている。真人は大人になったら、ドクターみたいになるかもしれない。

「数学はどうや？」

貴弘は私の酢豚から、タマネギを摘みながら言った。私がタマネギを嫌いで、いつも皿の隅に避けてるのを気付いていたのだ。

美代の食欲は凄まじい。私が残したパンやバナナ、牛乳なんかを「食べんとね？」と、返事を待たずにさらって行く。最近、真人は

美代のことを見ないようにしている。

「家庭教師の先生に数学を教えて貰って、分ったや？」

「分かったよ」

「そっか。やっぱり本職の人は分かつや」

「うん」

私は何の気なしに頷いた。

「先生は、何処から来とつと？」

真人が眼鏡をずり上げながら聞いた。

「人吉市内から？」

「う、うん……」

瑞上村近辺では人吉市しか知らなかった私は、曖昧に頷いた。

「へえ、何歳位の人ね？」

「うゝん？四十歳位の人」

「四十歳？本職は？家庭教師じゃなかる？」

「お父さんの知り合いの人で、……本職は他にあるよ」

「ふーん」と、真人はそっぽを向いた。

恐らく、真人には私の嘘が分かったのだらう。その証拠に作り笑顔で、「じゃ、うちも家庭教師頼もうかな。来年は高校受験だし」と呟いた。

「まこちゃんは、人吉の高校には行かんとやる？」

「うん。熊本市内か、福岡かやる。貴ちゃんは、人吉や？」

「うん」

そう言っで貴弘は唇を噛んだ。

「まこっちゃん」と、「貴ちゃん」は、生まれてから今までずっと一緒に育った。貴弘も美代と同じように、四人ですつと一緒にいることを望んでいるのだと思った。

「人吉に行けば良かどに！」

美代の悲痛な叫びは、真人に拒絶された悲しみから来ている。

「俺は私立の高校に行つて、東京の大学に行くけん」

それは、美代に対する決別の宣言だった。それでも鈍感な美代は、真人が大学を卒業してあの瑞上保養院を継いで、自分と結婚してくれることを待つのだらうか。

「私も、私立に行くかも知れん」

「え？お前もや？」

貴弘が驚いた顔で私を見つめる。

「うん。私立の高校に行つて、私も東京の大学に行く。だつて、ここは私の故郷じゃないもん。お父さんの気まぐれで来たただだから」

私も決別宣言をした。本当は、うちに私立高校に行くお金があるかどうかも分からなかった。でも大学は絶対に東京に行つて、それから留学したいとも考えていた。

余所者のプライド

「ここは私の故郷じゃない」と言う発言が、三人にダメージを与えたのを感じた。「余所者」扱いしないように心がけていた彼等は、私が寧ろ、余所者で居たかつたんだと言う事実には驚きを隠せないでいる。

「もう、昼休み終わるよ。机、離さなきゃ」

「おう、そうだな」

席を離すと言っても、窓際から私、美代、貴弘、真人の順番で一列に並べるだけだった。

午後の授業中、ずっと窓の外に広がる森を眺めていた。また雨が降り出して、どんどん激しくなっていた。そんな雨の中、ドクターがあの手の下で私を待ってる。その映像が頭の中をぐるぐる回って授業どころではなかった。

しかしたった四人の生徒の様子を、教師が分からない訳がない。放課後、担任の柳瀬に職員室へ呼び出されてしまった。

生徒数が少ない学校だから、教師は複数の教科を受け持っている。柳瀬は国語と英語、そして女性だからだろう、家庭科を受け持っていた。つまり私の優秀サイドのみを知る人間だ。

「小田さんに、貴弘君が補習しとったって。びっくりしました。だって、小田さんはあんなに優秀やけんね」

柳瀬は不思議な言葉を話した。標準語と方言が変な風に混じった。独特な、柳瀬語。出身はこの地方じゃないらしいから、私もここに長く住めばこんな変な言葉になるんだろう。

柳瀬はいつも、学校指定の体操服の上下を着て居た。ガリガリに

痩せていて、黒縁の丸眼鏡をしている。年齢不詳で、その化粧つけない顔は二十代にも見えだし、その猫背の丸い背中中は四十代にも見えた。勿論、独身だった。

「私、理数系が苦手なんです」

「そうなんだってね。先生知らなかったですよ」

「はあ」

「どう、学校は馴れたね？」

「はい。まあ。もう二ヶ月ですし」

「みんなと仲良くしてる？」

「はあ、適当に」

私は苛々と爪先で床を蹴った。

上履きは、先が黄色のゴムでキャンバスとコンビになっている、センスの無いデザインだった。そして最悪なことに学校の規則で、甲の部分にはマジックで「小田」と書いてあった。

「都会とは勝手が違うから戸惑う部分もあるだろうけど、何でも相談してね」

柳瀬は、そこだけぞろっと標準語で話した。きつとこの言葉は前から用意されていたんだろう。私の顔に苦笑いが広がったのを確認すると、

「まあ、小田さんはしっかりしてるけん、大丈夫と思うばってんね」と、前髪を虫ピンで留めた。それはさっきまで眼鏡の半分まで垂れていて、見ているこっちが煩わしかった。

「はい」

一礼して職員室を出ると、廊下に真人が立っていた。壁に寄りかかって、制服のポケットに両手をつっ込んでいた。いつもの彼らしくなく、不機嫌そうな表情を隠そうとしない。

「どうしたの？」

「小田さんが、遅いから。……もうちょっとで、職員室に殴り込もうと思っとな」と

「え？どうして？」

「うん。美代が柳瀬に、小田さんがみんなに打ち解けようとせんつて言っとなけん」

「あ、そうなんだ」

彼は少し困った顔をして、眼鏡を外した。

「美代、最近、不機嫌やけん。俺のことで」

最初から真人の顔立ちが美しいのには気付いていたが、こうして傍でみるとついつい見とれてしまう。

「ごめん。私急いだから、歩きながらでいいかな？」

待っていてくれたのにも拘わらず、私の頭の中にはドクターしかなかったので、ついつい急かすような口調になった。

「おう。貴弘は、家の手伝いがあるって帰ったけん」と、歩調を早めながら慌てて告げる。

「あ、そう」

何故か真人は、貴弘の情報を私に伝えた。

「あのさ、真人君は何か勘違いしてると思う。私は貴弘君のこと好きじゃないよ」

「え？嘘」

「嘘じゃないよ。別に好きじゃないよ。あー、友達としては好きだけど」

「あ、ああそつかー。そうなんだ。何か、貴ちゃんと、小田さん、お似合いやったけん」

「あははははは」

私は渴いた嘘臭い笑いを返した。なぜ、そのことで真人が嬉しそうに笑うのか不思議に思いながら。

魅力的な皺

「雨、凄かね」

校舎を出ると、瑞上保養院の公用車が停まっていた。運転席に居るのは、白衣を身に纏った 家内 だった。

「雨の酷かったけん、迎えに来てくれるごと電話したったい。小田さんも乗っていかんね？」

私はできるだけ 家内 の近くに寄って、彼女の顔を観察した。夢の中より薄化粧の 家内 が、ぺこりと頭を下げる。その親密な笑顔は、私の素性を知ってることを表している。こんな小さな村だ。見慣れない中学二年生は「小田葵」だと分かるのだ。

家内 は頬が瘦けた面長の顔に、ランランと光る大きな瞳をしていた。確かに 家内 は美しい。悔しい位に美しい。けれど……、笑った時の目の下の皺や、生え際に覗く数本の白髪は、私に優越感を持たせるに十分だった。

「真人さん、お母さんが忙しくて来れなかったけん、私が代わりに来たとです」

家内 の声は、その華奢で弱々しい風貌とは違って、低くガラガラと喉の奥で唸るようだった。その事実が、私を更に嬉しがらせた。

「小田さん、どぎゃんする？乗って行くね？」

「私、森を抜けたら近いから。ありがとう」

「分かった。じゃ、明日」

車を発進させる時、 家内 が優しく微笑んだ。その余裕の表情が、私を苛々させた。私の勝手なライバル心なんて、 家内 が知る由もない。

「今日も遅かったね。来ないかと思ったよ」

あの木の下で茶褐色に変色した単行本を読みながら、ドクターは私を待っていた。

「すみません。職員室に呼ばれてたんです」

「職員室！怒られたのかい？」

面白そうに笑った。

「ち、違いますよ！私はそんなキャラじゃないですから」

「どんなキャラなんだい？」

「さあ」

今日の彼は、無理に陽気な振りをしているようだった。小屋に入ると、ビニール袋の中からシュークリームを二個取り出して、鼻歌交じりに紅茶を入れる。

「患者さんの家族に貰ってね。私は甘い物は余り食べないんだが、シュークリームだけは食べるんだ」

彼が進んで自分のことを話すことは初めてだったので、私はその貴重な情報を噛みしめた。

「さあ、食べなさい」

大口を開けてかぶりついたドクターは、溢れて指先に付いたクリームを舐めながらあつと言う間にそれを平らげた。そして思い出したように、ジーンズのポケットからウェットティッシュを取り出す。

「用意が良いですね」

「ああ、家内が持たせてくれてね。私はいつもこうなるから……」

また 家内 だ。苛ついて私も大口を開けてかぶりつくと、大量のクリームが溢れ出た。

「ほらほら」

唇の周りのクリームを、ドクターが拭き取ってくれた。

「あ、制服にまで垂れてるよ」

意外に楽しそうな顔だ。

「すみません」

でもちよつとにやけそうだった。 家内 がドクターの世話をする。そしてドクターは私の世話をする。二人の間に、私がやつと滑り込めたような気がした。

「——触らせて、貰えませんか？」

「え？何に？」

「皺」ドクターの顔を指差す。

「ドクターが笑った時の皺が触りたい」

「不思議な子だね」

目を閉じたドクターの口の横、目の下をそつと撫でる。湿度の高いこの森の中でうつすらと汗が浮いた彼の皮膚は、私の指の下で確かに呼吸していた。植物みたいな人だ。

「もういいかな？」

「はい、あ、すみません」

「子供が小さい頃ね……」

言いかけて、紅茶を口に含んだ。頭の傷も、心の傷も、全て私に隠すつもりなんだろうか。 家内 とだけ共有している秘密に、私も割り込みたかった。

「子供が、いるんですか？」

「うん。正確にはいた、かな」

「亡くなったんですか？それとも……」

「この話は止めよう。……今日は、患者さんが亡くなって、私も感傷的になってるようだ。変なことを口走ってしまったよ」

私の指を貴方の傷に触れさせて。私ならきつと、傷を癒やすことができる。その根拠の無い自信が何処から来るのか、私には分からなかった。父ほどに年の離れたドクターを、私を癒やすのが使命だとさえ感じていた。

「患者さんはね、私の担当してた患者さんで。あ、今は君のお父上の担当なんだが……。亡くなったんだ。昨夜」

私は昨夜父が話していた、容体の悪い患者のことを思い出した。

「彼女は精神病であると同時に、癌も患ってたんだけど……。精神病患者は他では受け入れてはくれないし、また癌患者に対応するような施設は保養院にはないから、そのままほっとくしかなくて。彼女は六畳一間の部屋に閉じこめられてたんだ。亡くなったんだ。凄まじい最後だったよ」

「どんな？」

「それを聞いたら、シュークリームが不味くなる。家に帰ったら、お父上に聞いてみなさい」

ドクターはそう言って、もう一杯お茶を注いだ。

疑惑の森

「柳瀬先生から電話があつたのよ。授業に集中してないって。あんだどうしたの？」

夕食を囲んで、母が不機嫌な声でそう告げた。

「そうなのか？」

晩酌中の父が、私を怒る体制になる。父は初めて聞いたように驚いた表情を作ったが、本当は私を叱るように、母と事前に打ち合わせされていたのだと感じた。

「私だって、この田舎に馴染もうと必死なんだよ！」

「どうだか」

私の名演技を信用しない母は、そう言い捨てて台所に消えた。

「お前、ここが嫌なのか？」

「私はつい二ヶ月前まで、都心のお洒落な中学校に通ってたんだよ。それがこんな田舎の、泥道を毎日歩いて学校に通わなくちゃならなくて！少しは、ぼーっとする時間だってあつてもいいじゃない！」

「まー、そうだよなー。やっぱ馴染めないか？」

父は口煩いが、娘に甘い。私は彼の攻め方を知っていた。

「努力はしてるけど、方言とか、分かんないな。私だって、大変なんだよ！」

「そうだよなー」

母が台所から戻って来る間に、父は攻略できたようだ。

「中間試験だって、あんな田舎の子達にも勝てなくて。しょうがないわね。」

「英語と国語は、ダントツトップだったもん。」

「トップで当たり前じゃない！あんたは進学校に通ってたのよ！」

「田舎の子達はマンツーマンで授業を受けてるから、意外に勉強ができたりするんだよ。な？」

父が私の加勢をしてくれて、母の怒りも少し治まったようだ。しかし、父の次の言葉でまた機嫌が悪くなる。

「今月から、夜勤が始まるから。」

「夜勤？貴方みたいな中堅のドクターまで、夜勤をするの？」

「ああ。その方が給料も上がるし。葵に家庭教師を付けなければいいだろ？それに一週間に一回だから。」

「一週間に一回も？」

父が以前働いていた病院には入院施設が無かった為、夜勤が無かったのだ。母の表情が忽ち険しくなっていく。

「お父さん、容体の悪かった患者さんはどうなった？」

私は二人のそんな雰囲気を変えたかった。

「彼女は、亡くなったよ。壮絶な最期だった。」

「どう凄かったの？」

「うん」と父は一瞬躊躇して、母の顔色を伺った。

「部屋中に、どんぶり一杯の灰色の便をしまくって、亡くなったた

よ」

「え？」

「それを看護士達が綺麗にして、洋服を脱がせてね。彼女は四十過ぎだったんだけど、子供も生んでなくて、綺麗な裸だった」

「もう！そんな話を食事時にしないでよ！」

母は益々不機嫌になって、乱暴に食器を片付け始めた。

「ご馳走様」

こんな時は、退散するに限る。早々に夕食を切り上げて、自分の部屋へ戻った。両親は、私のいる所で口論はしない。ただただ重苦しい沈黙を続けるだけだ。だから、私は彼等の視界からフェイドアウトする。

古いベッドに寝転がって、空想の世界を漂う。不器用な恋人同士が恋を実らせて行く課程や、ドラゴンや騎士が登場するようなファンタジー。私は物心ついた時から、この遊びを何より好んだ。

きつく束ねた髪が痛くて思わず解くと、ドクターの煙草の匂いがふわっとした。私は思いついてガーゼのハンカチを髪に擦りつける。この匂いを保管しようとしたのだ。私にとって、この匂いだけが現実。それは空想のラブストーリーや、ファンタジーより私の心を弾ませた。

そして、今日のドクターの顔を思い浮かべる。彼はその患者さんの美しい裸を見て、どう感じたろうか？晒し者にされた彼女をどう感じたんだろうか？

精神病院に長く入院した人達の末期は悲惨だ。親が生きている内は、お盆や、正月は実家に連れて帰ってくれる。しかし親が亡くなった後、兄弟や姉妹だけになると扱いはがらっと変わる。彼等は三六五日病院で過ごし、そこで寂しく亡くなる。そして亡くなったら病院で葬儀を行い、お骨だけが家に帰る。帰れる家があれば、の、

話だが。

ドクターはそう言った事も含めて、亡くなった患者さんを思い悲しんでいたのだろう。父はその職業のせい、人の痛み苦しみ死に關して段々鈍くなつて来ていた。ドクターが患者さん一人一人の死を正常に受け止めていることに感動し、そんな彼を愛しく思った。

部活も無期限に中止され、全校生徒での集団下校が始まった。森に現れる痴漢が、そんなに深刻な問題になつていようとは思つていなかった。

昨夜も一年生の女子が、森の中で襲われたそう。体育館で校長がその事実を伝えた時、「襲われたって、どきやんされたつやるか？」と、美代が耳打ちをした。余りの恐怖と興奮で、私と仲違いしていたことを忘れてしまつたらしい。

「さあ、その子、学校を休んでいるみたいだから……酷いことをされたんじゃない？」

「美代、兄さんが三年生に居つとぞ。聞こゆつと？」

はいはい、と貴弘に返事をした美代だったが、興奮は治まらない。こんな美代を止められるのは、真んしかいない。しかし、彼は風邪を引いて休んでいた。

「うちのお母さんの話じゃ、そん子は強姦されたらしかよ。もう学校にも来られんかもしてんね。こないだ襲われた三年の女子は、人吉に引越すらしかよ」

強姦と言う意味を、美代が何処まで理解しているか怪しいもんだつた。騒ぎ続ける美代を見て、貴弘が肩を竦めた。

こんな小さな村では、部外者が入り込むと直ぐに目に付く。だから犯人は村の住民でないか？美代の母親はそう言っていたそう。

美代の母親にしては随分と鋭い推理だ。

「小田、森の中を通って帰らん方が良かぞ」

貴弘が心配そうな顔で言った。それは困る。家に帰ってから森に行く、かなり遠回りになるのだ。どうしよう……。パニックになった私に、畳みかけるように美代が付け加えた。

「野上さんが、疑われとるらしかよ」と。

瞬間、心臓がきゅと縮まったような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9634x/>

瓶詰の恋

2011年11月5日14時17分発行